

千葉県八千代市

麦 丸 遺 跡

1982・3

八千代市遺跡調査会

序 文

近年、開発の進む本市にあつて、その変貌は著しいものがあります。また、それに伴ない遺跡の調査も増加しており、八千代市の原始・古代の姿が解明されていく反面、貴重な先人たちの文化遺産が失われてゆくという側面を持っています。そのため不注意な行為によって、遺跡が失われないよう、私たちは努めていかなければなりません。

今回ここに報告する「麦丸遺跡」は、各事業者と千葉県教育委員会、八千代市教育委員会が最善の方法を求めて協議を重ねた結果、記録保存の処置を講ずることとなり、調査を実施したものです。調査においては八千代市の原始・古代を解明するうえで、多大な成果を上げることができました。

これら成果をまとめた本書が、各地の歴史を考える資料のひとつとなることを願うとともに、活用されることを念じております。また調査にあたって、調査に参加された方々に対して、感謝申しあげるとともに、その他関係各位に対し、深甚なる謝意を表する次第です。

昭和56年3月

八千代市遺跡調査会

会長 村田 和彦

例 言

1. 本書は千葉県八千代市大和田新田字変丸台640・641番地の発掘調査の報告である。
2. 調査は千葉県教育委員会の指導によって、八千代市教育委員会を事務局として、八千代市遺跡調査会が実施した。
3. 発掘調査は、昭和56年8月11日より9月5日にわたって実施した。
4. 本書の執筆にあたっては、Ⅵ、石器については久保脇が、他は朝比奈があたった。
5. 調査にあたって下記の方々の協力、指導をえており、記して謝辞としたい（敬称略）。

八千代市農政課・八千代市農業協同組合・財団法人千葉県文化財センター・周郷建設・佐久間豊・阪田正一・村出一男

6. 調査組織は以下のとおりである。

会 長 村出和彦

事務局 清水盛人・小笠原和也・朝比奈竹男

調査員 久保脇美朗・有本勝・秋山利光

補助員 木村 進・高橋健次・野々山進・板倉浩二

目 次

第Ⅰ章	発掘調査に至る経過	1頁
第Ⅱ章	遺跡の立地と歴史的環境	2頁
	1 遺跡の立地	2頁
	2 麦丸遺跡の歴史的環境	2頁
第Ⅲ章	調査の概要	6頁
	1 調査の方法	6頁
	2 調査の概要・経過	6頁
	3 麦丸遺跡の基本土層	10頁
第Ⅳ章	遺物	11頁
	1 概要	11頁
	縄紋時代の遺物	11頁
	3 歴史時代の遺物	16頁
	4 近世・近代の遺物	16頁
第Ⅴ章	小結	18頁

挿図目次

第1図	麦丸遺跡の位置と周辺の歴史的環境	3頁
第2図	麦丸遺跡地形図	7頁
第3図	麦丸調査区設定図	8頁
第4図	麦丸遺跡の基本土層	10頁

第5図	麦丸遺跡出土の遺物(1).....	12頁
第6図	麦丸遺跡出土の遺物(2).....	13頁
第7図	麦丸遺跡出土の遺物(3).....	15頁
第8図	麦丸遺跡出土の遺物(4).....	17頁
第9図	麦丸遺跡出土の遺物(5).....	17頁

図版目次

図版1	麦丸遺跡出土の遺物1).....	21頁
図版2	麦丸遺跡出土の遺物2).....	22頁
図版3	麦丸遺跡出土の遺物3).....	23頁
図版4	麦丸遺跡出土の遺物4).....	24頁

I 発掘調査に至る経過

八千代市は京成電鉄成田線沿線に広がる住宅地（市南部）と、それ以北の市域の大半を占める農業地域とに、大きく区分することができる。今回調査を実施した麦丸遺跡は、この農業地域の南端に位置するものである。対象地の南側の地区は、昭和50年代初期から日本住宅公団（住宅・都市整備公団）とに統合される）によって益田地区土地区画整理事業が進められている所であり、一方で農業地域として耕作地が広がる所である。

そのような周辺状況の中で、昭和56年4月八千代市経済部（農政課）は「仮称農政センター」の建設を計画している旨連絡をうけた。また八千代市農業協同組合は、その隣接地に「農協本店」の移転・建設の計画の連絡をしてきた。このため八千代市教育委員会は、土木工事を伴うものとして「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」照会をもとめ、千葉県教育委員会へ副申した。

千葉県教育委員会との現地踏査の結果、該地に縄文式土器片の散布を認めたこと、道路を一つへだてた地区が益田遺跡群（千葉県文化財センター調査）であること、市遺跡台帳第33麦丸遺跡に重なる地区であることより、遺跡として再確認せざるを得なかった。この結果をふまえて、県教育委員会と市・経済部・市教委、県教育委員会と市農業協同組合・市教委は、遺跡の取扱いについて協議をもった。慎重な協議を重ねた結果、記録保存の措置もやむを得ないとの判断に至り、調査の準備に入った。

しかし市経済部の対象地の調査は、市教委では対処できない状況にあった。このため市遺跡調査会が実施することとなっていた、農協本店用地の調査と隣接地であることより、併行して実施していくこととした。調査は同年8月に実施し、次に報告する成果を得た。

※日本住宅・都市整備公団の行っている事業については、財団法人・千葉県文化財センターによって調査実施中である。既に一部終了しているところもあるが、調査継続中であり、益田遺跡群として仮称した。

II 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地

本遺跡の調査対象地は千葉県八千代市大和田新田字麦丸台に所在し、仮称農政センターは644番地外、農協用地は641番地外である。八千代市役所の北北東約2kmの位置で、萱田地区土地区画整理事業地の道路一本へだてた北隣である。現状は畑地であり、道路より約2mほど低くなっている。

麦丸遺跡は昭和45年に千葉県立八千代高等学校校史学会の行った分布調査によって確認されており、土偶破片や黒曜石とともに縄文時代の土器が採集されたと言う(註1)。また調査中における周辺地域の分布観察においても、縄文時代から平安時代の土器散布が認められた。これらから広い範囲を持つ包含地として扱えられる遺跡で、その一部を調査したわけである。

八千代市は下総台地西部に位置し、水田面で6~12m、台地上で14~25mの標高差のない地域である。市中央部を南北に縦断する印旛沼疎水として開削された新川と、それに注ぐ桑納(かんのう)川とによって、大きく3つの台地に区分される地形である。またこれら台地も複雑に入り込む樹枝状の谷津によって、形づくられる。水系はいずれも印旛沼へ流入するもので、東京湾に注ぐものはない。

このような地理的条件のもとに、麦丸遺跡は、新川が流れる広い沖積地の中央部に位置する麦丸の集落の東側より南下して入り込む谷津の奥に所在する。谷津を囲む両台地に所在する遺跡を称しているが、調査対象地はこの谷の奥、谷頭を中心として取り囲む台地上緩斜面に立地する。標高は23~24mである。

2. 麦丸遺跡の歴史的環境

該地の明治時代以降の歴史は、陸軍参謀本部及び国土地理院の地図を参照すると、林地から畑地への転換が見られる。この地区でもまた先人たちの営為の痕跡が見られるわけだが、周辺の遺跡を見ることで、麦丸遺跡理解の一助としたい。

八千代市における遺跡調査は乏しく、昭和20年代後半の調査が初めてではなかろうか(註2)。やはり調査例が増加するのは、昭和40年代に入ってからで、宅地開発と一致する傾向にある。村上団地造成に先行する調査や、道路の調査がその例のひとつである。これらの調査から先土器時代から江戸時代に至る迄の、営為の所産が次第に明らかにされつつある。



第1図 麦丸遺跡の位置と周辺の歴史的環境

先土器時代では隣接する釜田遺跡群（83・註3）より局部磨製石斧やナイフ形石器など多量に出土しており、それまで村上遺跡群（4～6・註4）や釜田町川崎山遺跡（65・註5）、池ノ台遺跡（91・註6）、向山遺跡（110・註7）などでポイント・ナイフ形石器が単独ないし小数の出土に比して、その調査の成果が期待される。しかし小数の遺跡ではあっても出土例が増加しており、該期の姿が次第に明らかになりはじめたと見えよう。

縄文時代は本遺跡の周辺においては、その姿を捉えられていない。該期の遺跡が相対的に少ないこともあるが、住居址を伴う調査が少ないことに因るかも知れない。桑橋新田遺跡（43・註8）において前期を主体として晩期までの継続したものや、阿蘇中学校東側遺跡（14）の中期の包蔵、向山遺跡（110・註7）での包蔵地が調査されているだけである。近隣においては釜田遺跡群（83・註9）などの後期遺跡が知られている。

弥生時代になると本市域では遺構を伴う遺跡が増加するようで、村上遺跡群（4～6・註4）や釜田遺跡群（83・註3）、阿蘇中学校東側遺跡（14・註10）などが代表例である。これらは後期の住居址を伴ない、集落として調査されたものである。また桑橋新田遺跡（43・註11）では方形周溝墓の周溝覆土より鉄剣が出土し、弥生時代については「ムラ」の生活の復原がなされつつある。これら後期の所産である各遺跡においては、所謂印籠・手賀沼系と呼ばれる土器の出土もあり、阿蘇中学校東側遺跡では遺構によって多少はあるものの出土土器の主体を占めている（註10）。これから該期の文化圏に入っていたと考えられ、弥生時代の姿を写し出している。

古墳時代、特に古墳については市北域あるいは西域にその分布の主体をおく。近隣では村上塚群（3・註12）、勝田台古墳群（73）七百余所神社古墳（86・註13）等が知られている。桑納古墳群（38・註14）の調査では、2号墳において帆立貝形の埴丘を持ち、人物埴輪が、円墳の1号墳では鉄剣や畿などが副葬されていた。また根上神社古墳（76・註13）は、市内で現存する前方後円墳である。

古墳時代から平安時代の集落遺跡としては、調査例が増加する。古墳時代としては釜田遺跡群、釜田町川崎山遺跡（註5）、小板橋遺跡（98・註15）などが調査されている。小板橋遺跡・釜田町川崎山遺跡では石製模造品・木製品を多量に出土して、工房址が確認されている。

奈良・平安時代においては遺跡数の増加をみ、150軒余の村上遺跡群を筆頭に、名主山遺跡、（9・註16）、窪川遺跡群、桑納前畑遺跡（40・註17）などの調査例がある。「倭名抄」に見える「村神郷」が村上遺跡であるかなお考究が要求されようが、この時代の解明に資するデータは集積されはじめている。

鎌倉時代以降になると、城館跡や塚が遺跡の主体となる。高津館跡（80・註18）は鎌倉時代とされるが、米本（よなもと）城跡（77・註18）、吉橋城跡（78・註18）、尾崎館跡（82・註18）、

権現砦跡(79)などは室町時代のものであろう。また塚は八千代市遺跡台帳に記載される遺跡のうち最も多く、150基余が知られている。米本塚群(75)、村上新山遺跡(88)、村上塚群(3・註12)など、列記すれば数多くなる。村上供養塚(3・註19)では常滑壺2点・小皿10枚・銅銭293枚が出土しており、プランは方形であったと言う。

〔参考文献〕

- 註1 八千代高等学校史学会「遺跡分布調査」史学報2・1971
これに補足したものが、八千代市教育委員会「八千代市遺跡分布調査概要」1972である。
- 註2 玉口時雄他「印旛沼出土の刺舟」古代3・1951年 早稲田大学考古学会
大川 清他「千葉県印旛沼阿蘇村粟谷古墳」古代11・1968年 早稲田大学考古学会
- 註3 (財)千葉県文化財センター「年報」
- 註4 千葉県都市公社・日本住宅公団「八千代市村上遺跡群」1974年
- 註5 八千代市遺跡調査会「荻田町川崎山遺跡発掘調査報告」1979年
- 註6 八千代市遺跡調査会「池ノ台遺跡発掘調査報告」1979年
- 註7 1981年6月確認調査。7～9月本調査を実施し、現在整理中。ナイフ形石器・ポイントを出土し、縄文時代については遺構は検出されなかったが、中期を主体として包含層が認められた。
- 註8 1980年年度に調査。整理中。全体的に黒浜式土器の出土を見ているが、前期後半以降は地点的に出土の时期的差があった。検出遺構は国分期竪穴住居、縄文時代の土壌である。
- 註9 坂田正一氏御教示(文化財センター荻田事務所)。縄文時代後期の出土をみているという。
- 註10 八千代市遺跡調査会「阿蘇中学校東側遺跡」1980年
- 註11 1976年調査。未報告。
- 註12 八千代市都市部「八千代市村上古墳群」1979年
- 註13 八千代市教育委員会「八千代市の文化財(パンフレット)」1980年
同 「八千代市の文化財第二版(パンフレット)」1982年
- 註14 八千代市「八千代市の歴史」1978年
- 註15 1980年調査。整理中。古墳時代の集落址で、和泉・鬼高期の遺跡である。
- 註16 八千代市教育委員会「名上山遺跡」1972年
- 註17 陸小学校北方遺跡調査会「千葉県八千代市桑納前畑遺跡」1978年
八千代市遺跡調査会「千葉県八千代市陸小学校遺跡」1981年
- 註18 八千代市教育委員会「八千代市中世館城址調査報告」1976年
- 註19 八千代市教育委員会「千葉県八千代市村上供養塚発掘調査報告書」1974年

Ⅲ 調査の概要

1. 調査の方法

麦丸遺跡の調査の方法は、グリッドによった。これは現状が畑地であること、対象面積の問題もあることを考慮して、グリッドの半分を調査することとした。そして遺構確認後に拡張するという手順をとり、遺跡主体の早急な検出を当初の目的とした。

調査区設定にあたっては、仮称農政センターと農協用地の境界杭を使用した。これは多角測量によって設定されたばかりであったことによる。土地境界間を東西の基準線として、線上に任意の点を設定し、その点より10m方眼を組んだ。調査区名称は調査区内北東杭をA1として、東から西へA・B～Hとし、北から南へ1・2～10とした。また10m方眼を5mグリッドに区画しI・II・III・IVと呼称した。

調査は南北基準線に沿うグリッドを4×2.5mを列ごとに行い、主体や遺物の出土の多いところは5m間に再設定した。また先土器時代の確認のため、試掘を谷津に落ちる間際に対して行った。

2. 調査の概要・経過

周辺の遺跡展開から考えての今回の調査は、対象を先土器時代及び縄文時代として行ったものである。その結果は先土器時代及び縄文時代の遺構は確認できなかったが、縄文時代の包含地として認められた。

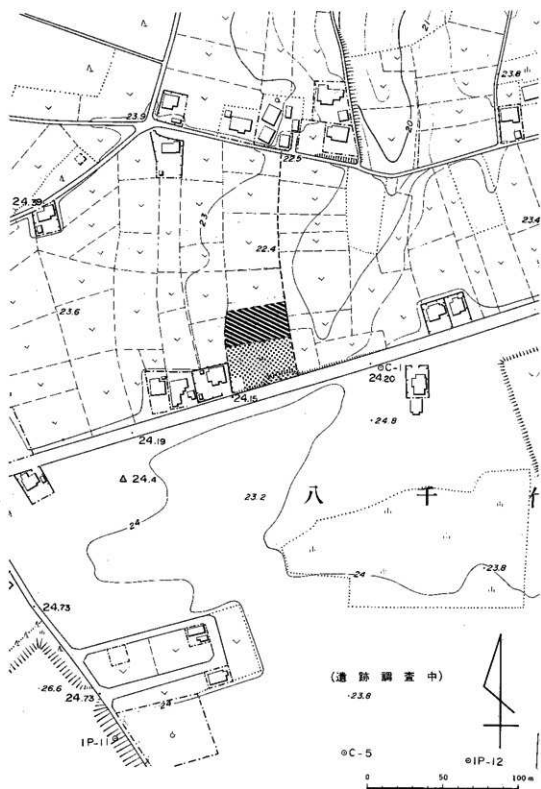
日誌抄

昭和56年8月11日(日) 耕作をしていないため雑草が繁茂し、見通しも悪いので草刈りを行う。調査区設定のために、杭打ち作業を始める。(～13日迄継続)

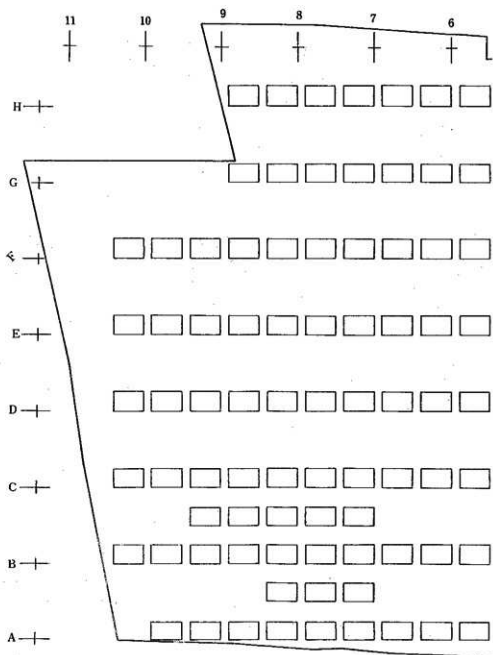
8月14～16日 盆休みとして、現場は中止する。調査員等は現場に入る準備を進める。

8月17日(月) 発掘調査に入る。仮称農政センター用地を主体とした。G1・2、H1・2より後期土器片出土。黒色土の堆積が極めて薄く、ローム迄40cm位である。

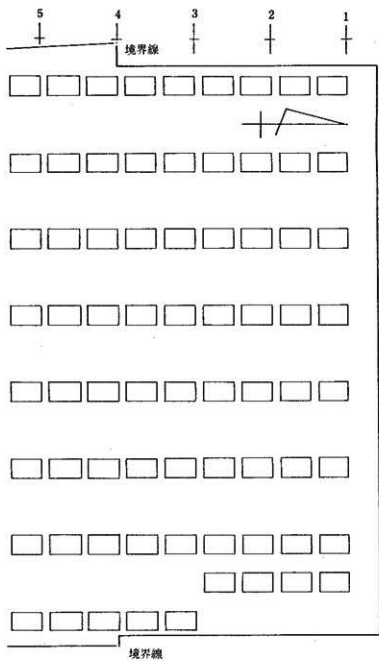
8月19日(水) 土層堆積図作成準備のため、B列東壁際を部分的に掘り下げてみる。茶褐色土下に黒色土があらわれ、谷津の続きが認められた。茶褐色土迄は地表から約90cmで、その下に黒色土があらわれる。



第2図 麦丸遺跡地形図



第3圖 麦丸調査区設定図



0 30 m

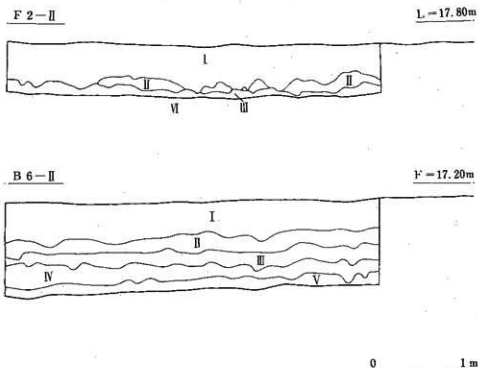
- 8月20日(木) C 8-I・II グリッドで後期土器片が認められ、包含層は茶褐色土層である。
- 8月24日(月) 先土器時代の確認をはじめ。土器片錘出土。
- 8月25日(火) 昨口の継続。C 4-II、B 3-II、D 4-I、D 5-II、E 5-II、E 6-II
グリッドで、先土器時代の確認を行う。
- 8月27日(木) 図面等の作成に入る。

3. 麦丸遺跡の基本土層 (第4図)

本遺跡が谷頭及びそれを囲んだ台地上に展開していたため、基本土層の堆積には若干の差異があった。1～4列付近で浅く、次第に谷津の中に落ち、8列でまた浅くなるといった様であった。基本土層は主として色調で把握することとして、以下のようにした。

第I層 暗褐色土層 表土耕作土層

第II層 黒色土層 比較的粒子の細かい粘性に乏しい土。土層のしまりにやや欠け、地点に



第4図 麦丸遺跡の基本土層

よって厚薄がある。

- | | | |
|-----|-------|---|
| 第Ⅲ層 | 暗褐色土層 | 色調はⅡ層に比しやや明るい、土質は近似する。 |
| 第Ⅳ層 | 茶褐色土層 | 色調やや赤味を示す。Ⅱ・Ⅲ層に比して粘性・しまりも強い土層で、粒子は比較的細かい。 |
| 第Ⅴ層 | 黒色土層 | 粒子の非常に細かい土で、色調は極めて黒い。Ⅳ層に比して粘性・しまりともやや劣る。 |
| 第Ⅵ層 | 褐色土層 | ローム層 |

第4図に示したように、台地上平坦部及び緩斜面では耕作によるためか、第Ⅱ層の堆積は認められないか未発達であり、Ⅰ～Ⅳ層中に遺物が混在する。一方谷津の中ではⅡ～Ⅳ層の堆積がやや厚くなるが、遺物の量は少く、流れ込みであると思われる。

Ⅳ 遺 物

1. 概 要

今回の調査においては遺構は認められず、縄文時代の土器が主体を占める遺物のみの確認であった。先土器時代の確認も実施したが、該当するものは検出されなかった。このことから今回の調査対象地は、麦丸遺跡の一端に位置していたと考えられ、加曾利B期の包含層を調査した結果が、次の成果であった。

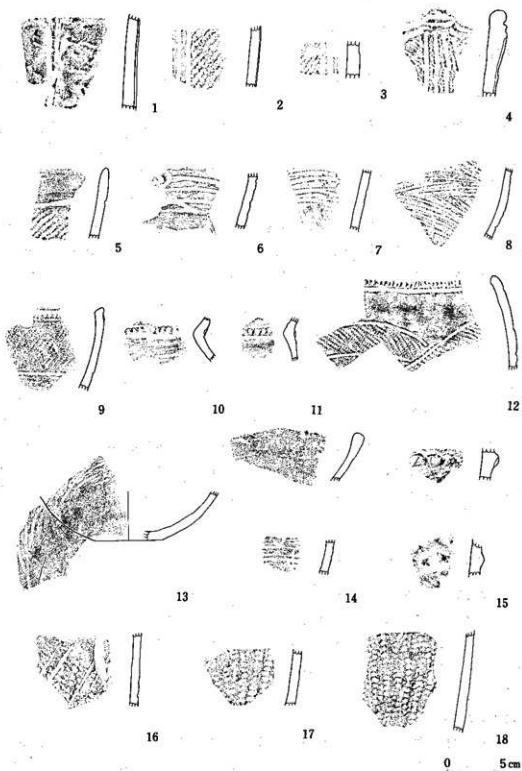
2. 縄文時代の遺物 (第5、6、7図1～3)

阿玉台式土器 (第5図1)

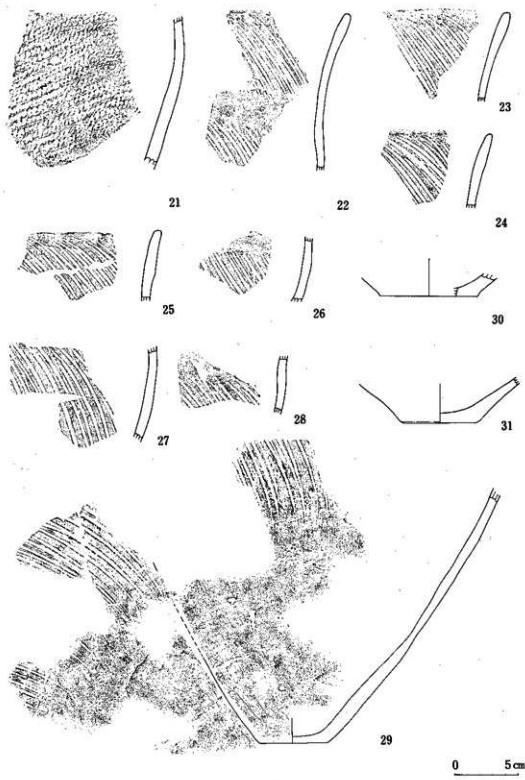
出土量は極めて少なく、いずれも小破片であったために、代表例を図示したにとどまる。深鉢形土器の胴部破片であり、表面の風化が進んでいる。文様は細い枯土紐のはりつけによる陸線が垂下するもので、器厚は8mmを測る。胎土は砂質で、雲母少ないものである。

加曾利E式土器 (第5図2・3)

いずれも弯曲の弱いキャリパー形の深鉢形土器の胴部破片であるが、この時期の遺物も極めて希れであり、代表例を図示したにとどまる。2は縄文を施文したのちに竹管によって沈線を垂下させたもので、沈線の凹みは浅くU字形となる。3は縄文を施文したのちに沈線を垂下させたも



第5図 麦丸遺跡出土の遺物(1)



第6図 麦丸遺跡出土の遺物(2)

ので、2に比しやや幅が広がるもの。色調はともに暗褐色で、焼成・胎土ともふつうである。

堀之内式土器 (第5図4)

地文に縄文を施したのちに、竹管によって沈線を、直線・曲線の組合せによって施したものである。口縁は波状をなし、縄文の施文は不明瞭であった。胎土に微石粉をやや多く含むが焼成は良好で、外面は黒色となっている。堀之内Ⅰ式であるが、この時期の遺物も少ない。

加曾利B式土器 (第5図5～20、第6図)

今回の調査ではこの時期の遺物が最も多く出土しており、90%以上の割合を占めていた。また調査区全体より出土しており、特に、浅い谷津周辺に多い傾向があった。精製・粗製土器の量的な差については、全体量が乏しいこともあり早断はしかねる状況である。

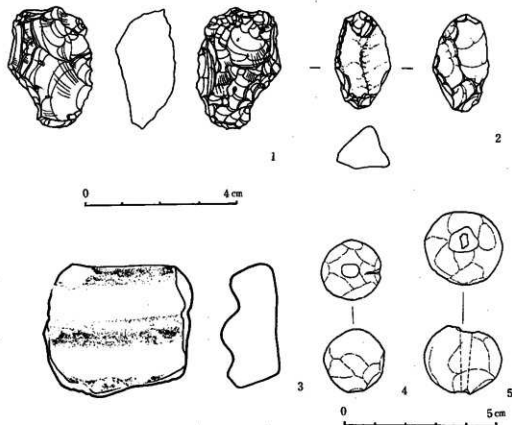
5は口縁3cmほどを無文として、縄文を施文したのち沈線を横定させたものである。沈線の上部5mmほどは磨消したもので、口縁はやや外反し、口唇は尖ったものとなる。暗褐色の土器で、胎土に白色1粒を含むもの。6・7は横定させる数条の沈線を、「S」字状?に区切ったものであろう。磨消されたもので、器厚は5～6mmを測る。焼成の良好なものである。

8は鉢の胴部破片で、竹管によって沈線による条線をはっきりと施すものである。単位は3段階に分かれる。表面はやや粗い。9は口縁部に縄文を施文したのち、沈線で区画して磨消したものである。口縁直下の沈線の間には、竹管によって刺突がやや細く繰り返される。10・11は胴部中位の破片で、沈線を2条横走させたのちに、刺突が施されたものである。区画外は磨消されたものである。

12は内湾するもので、磨消縄文を基本としたものである。縄文の施文後、竹管によって弧状・帯状に区画し、磨消したものである。口縁には沈線の横走後、口唇に刺突を施したものである。13・14は浅鉢の破片である。13は底部から胴下半にかけてであり、沈線が条線状に斜方向に施されたもので、8の施文と同じであらう。無文部は磨かれたもの。14はゆるい波状口縁を有する浅鉢で、器面の風化があり、遺存はやや粗い。文様はこの部分では認められないが、13と同じ施文であらう。口縁破片で、磨かれたものである。

16・17は貼りつけた粘土紐の隆帯に、指頭で押して施文したもので、小破片のため他の文様は不明である。18は縄文を地文として、条線を斜走させたもの。19～21は縄文のみの施文である。18～21の縄文はいずれも節が大きく、施文の浅いものである。

22～29はA7-Ⅳグリッドの一括の出土で、同一個体である。口縁は幾分外反し、胴上半でややくびれる器形であらう。頸部より口縁にむかって条線を走らせ、胴下半も条線を有するものであり、頸部に磨消による無文帯がある。胎土は緻密で、焼成はよく、暗褐色の土器である。



第7図 麦丸遺跡出土の遺物(3)

この時期の土器は、図版では精製土器（5～15）と粗製土器（16～21）、器形としては粗製であるが入念な調整を施される半精製土器（22～29）と分けた。しかし時期については、量的なことも考慮すると早断せずに、加曾利BⅡ・Ⅲ期として一括しておきたい。

土器底部（第6図30・31）

縄文式土器の底部については、接合しない状態で若干の出土をみた。いずれも文様がなく時期決定については、明示しえない。30は器厚は底部においても薄く、表面はヘラ削りによるやや荒い調整が加えられている。推定底径は72mmである。31は底径56mmを測り、小さい底径である。ていねいな調整が施されており、焼成も良好である。30・31とも底部から胴下半にかけて、外に大きく広がる形であること、それに比して底部が小さいことなどより、縄文時代後期の所産と思われる。

石器 (第7図1・2)

小型の石核の残核と、削器と思われるものが、それぞれ耕作土中から1点ずつ出土している。石核は不純物を含んだ添黒の黒曜石を素材とするもので、全面に不規則な方向の剥離痕が残されている。削器と思われるものは、片面に自然面を残した、断面が三角形をなすメウノの剝片を素材としている。側縁部と主剝離面の一部に細かな二次加工が施され、部厚い刃部を形成している。

土 鍬 (第7図3)

口縁を使用した土器片鍬であり、G8-Iグリッド出土。長軸は38mmを測り、断面は磨っている。縄を掛けた凹みはやや弱く、浅いものである。加曾利E式土器を使用しており、単独の出土であった。

3. 歴史時代の遺物 (第7図4・5)

土師器使用の時代に伴うものと思われる、土玉が2点出土している。4はF4-IIグリッドの出土で、最大径26mmを測り、孔を穿つものである。ヘラ削りによって形を調整されており、丸味を持つ孔である。5はF2-IIグリッドの出土で、最大径20mmを測る。孔はなくいびつな球体である。

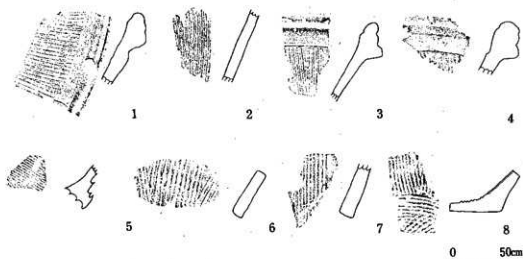
該期の土器片の出土はほとんどなく、この2点の単独出土であるため、時期決定について不明なところがある。が、胎土などより土師器が使用された時代の所産と考える。

4. 近世・近代の遺物

この時期の遺物については、陶磁器破片を主体としての出土であった。時代決定もできにくいものであるため、一括して扱うこととしたい。

スリ鉢 (第8図1~8)

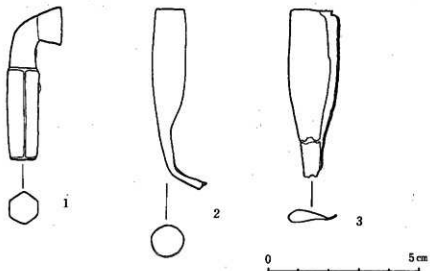
いずれも破片での出土で、耕作土中のものである。胎土の違いや刻み目によって、大きく2つに分けることができるようだ。これら胎土が荒く・赤褐色を示し、刻み目の細いもの(1~5)と、胎土緻密で、灰白色を示し、刻み目の太いもの(6~8)とである。口縁破片は3点(1・3・4)で、いずれも3段の丸味をあげたものである。内面は1は口縁から刻み目を施したのち2cmほど消し2いるだけだが、3・4は消したあと刻み目との境に沈線をひき区画しているものであった。6~8は刻み目が前者に比してやや太く、深く刻まれたものである。いずれも断面を磨っており、破損後に他の用途に転用されたものと思われる。



第8図 麦丸遺跡出土の遺物(4)

キセル (第9図1~3)

いずれもロクショウがでているが、遺存度はよい。1・2はガン首で、3は吸口である。1は六角形をし、つくりのていねいなもので、2・3は薄く、円形のものである。



第9図 麦丸遺跡出土の遺物(5)

V 小 結

調査時における周辺地区の上器散布確認での結果や、八千代高等学校史学会の分布調査(註1)の資料をもとに、縄文時代の遺構や奈良・平安時代の遺跡展開を想定した対象地の調査であった。しかしその結果は遺構は検出されず、縄文時代の包含地として扱えられた。先土器時代の確認作業も実施したが、該期についても検出されなかった。これらの調査結果をもとに、変丸遺跡について若干のまとめを述べてみたい。

調査において得られた資料は、主として縄文時代の遺物であり、石器2点・土鍾1点の他は土器片である。これら土器のうち、90%強を占めるのが加曾利BⅡ・Ⅲ式であった。これらの出土層はⅠ～Ⅳ層であったが、緩斜面においては始んどがⅠ層で、包含層は明確にし得なかった。また谷津の中では流れ込みの可能性が極めて強く、時期的差が殆んどないことなどもあり、層位的把握は不明のままである。このため包含地として扱えたわけであるが、調査対象地の限定性も考慮すべきであろう。

下総台地における遺跡のあり方として、遺構を伴わず、土器の若干の散布のものがあるが、変丸遺跡がそういった遺跡のひとつであるかは疑問をもつ。現在、八千代市では谷津を囲んだ両台地にわたる広い範囲を、変丸遺跡と呼称している。その両者の交叉する位置に調査区があり、単独の所在ではない。その地理的位置と遺物の出土量より、どちらの台地に展開する遺跡にせよ、遺跡の一端に調査区があったと言えよう。

また加曾利BⅡ・Ⅲ式土器については、まとまりを持つとは言え、量的にそれほどでないことから細分はさけた。だが、調査結果は変丸遺跡の時期的な地点差があったことを、推定できるものであり、それより加曾利BⅡ・Ⅲ期の上とした営為の地区の一画と扱えられまいか。市内において該期のまとまった報告がなく、比較検討できにくい状態であるため、詳細については資料増加をまちがいが、1980年の桑橋新田遺跡の調査(註3)でも出土地点の限定される傾向がうかがえた。この2者で共通するこの出土範囲の傾向は、該期の特徴となるのかどうか早断はできないが、今回の調査の結果得ることできた成果のひとつであろう。そして変丸遺跡の主体での遺構存在の可能性を、出土した遺物は指摘していると扱えたい。

註1 千葉県立八千代高等学校史学会「遺跡分布調査」史学報2・1971

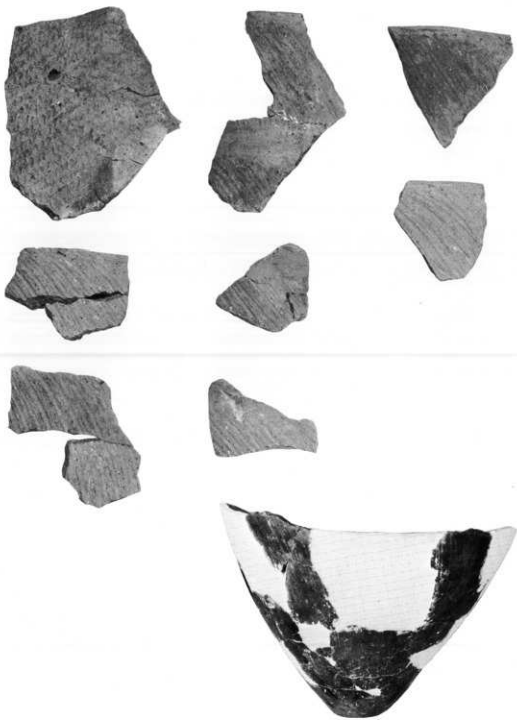
註2 整理実施中

写 真 图 版



麦丸遺跡出土の遺物(1)

図版
2



麦丸遺跡出土の遺物(2)



麦丸遺跡出土の遺物(3)



変丸遺跡出土の遺物(4)

千葉県八千代市麦丸遺跡

1 9 8 2

1982年3月20日 印刷

1982年3月31日 発行

発行者 八千代市遺跡調査会

印刷 株式会社山下印刷